啓蒙の世紀とアダム・スミス

山口 正 春

目次

- 一 はじめに
- 二 グラスゴウ大学の組織改革と学問的進歩性
- 三 スミスの道徳哲学
- 四 政治経済学の目的
- 五 社会的束縛からの人間の解放
- 六 むすびにかえて

一 はじめに

アダム・スミスは一七二三年にスコットランドの港町カーコーデイに誕生し、一七九〇年に他界した。だから彼は完全に一八世紀の人であり、一八世紀の最も核心部を生き活躍した人であることが分かる。⁽¹⁾ それでは一八世紀とは、どんな時代であったのか。

ヨーロッパの歴史において、一八世紀は「啓蒙の世紀」「啓蒙の時代」と呼ばれる。「啓蒙」とは、一般的には人間の理性に重きを置き、教育と知識の普及によつて、無知・蒙昧の段階から人々を啓蒙することを意味する。⁽²⁾ 学問・科学が発達する一方で、古い非合理的な制度が見直され、ヨーロッパ各地で種々の社会改革が行われた。人権の理念を掲げて、幸福と公正が追求されるようになったのも、この時代である。啓蒙の世紀の原理となった理性と批判の精神は、身分や宗教、性別などの社会的束縛から、人々を解放すべきであるという思想を生み出した。⁽³⁾ 身分制社会にはらむ不条理が鋭く指摘され、隷属状態にある人々の解放が各地で取り組まれ、特権階級や同業組合に対して社会変革が数々試みられた。⁽⁴⁾

イギリスでは、人間の抵抗権や個人的自由を説いた政治思想家ジョン・ロックに続き、経済の発展に伴うモラルの問題（富と徳の問題）を論じたスコットランド啓蒙思想家（啓蒙知識人）たちが、傑出した仕事を残した。⁽⁵⁾ フランスでは、モンテスキュや百科全書派の啓蒙思想家たちが活躍し、フランス革命の引き金となる急進的政治運動が展開した。⁽⁷⁾ 啓蒙の世紀には、それまで価値観の源泉であったキリスト教に対しても批判の目が向けられた。キリスト教的な知から離脱し、近代科学の諸分野が胎動を始める時代の到来である。「科学革命」⁽⁸⁾とも密接にかかわっているこの大

きな知の転換を、人間の認識の土台が「聖」から離れ、「俗」に移るという意味で「聖俗革命」⁹と呼ばれることもある。こうした知の大転換によって新たな知識人が生まれ、知の環境や組織が変化していった。ギルド的な構造をもつ伝統的な大学や教会、修道院に代って、王立アカデミーや科学協会が新しく知の中核組織となっていく。¹⁰

また大学も新しい潮流の影響を受け、神学を中心とする旧態依然とした大学は、啓蒙思想家たちとしばしば対立関係にあつたが、スコットランドやドイツ、オランダなどでは新しいタイプの大学が創立され、また古くからの大学でも改革が行われて、啓蒙の時代の教育と研究を担う自由な知の活動が営まれた。たとえば、ここで取り上げるアダム・スミスが学び教鞭を執つたグラスゴウ大学、デビット・ヒュームの学んだエディンバラ大学などが代表的である。こうした大学においては、伝統的な知の中心であつた神学部がその指導的な地位を追われ、新しい学問分野の講座に主眼が置かれるようになった。啓蒙の世紀にあつて、スコットランドの大学におけるこの新しい学問分野の講座は、道德哲学の講座であつた。道德哲学の講座は、まさにスコットランドの学問と思想を代表する講座であり、したがつて道德哲学は際立つて重要な学問であつた。¹¹ 当時、進歩的な教師がこれを担当して学生の人気を集めた。¹² 一九世紀になると社会諸科学が分化し、専門化がいつそう進むのであるが、一八世紀には、人間と社会の全般を対象とする包括的な学問としての道德哲学の講座が存在したのである。¹³ スミスがグラスゴウ大学に入学したのが一七三七年、一四歳のときであつたが、大学で彼が最も深い関心をもつて研究したのは道德哲学であつて、これは彼が大学在学中「スコットランド学派の父」と呼ばれたフランシス・ハチスンの影響によるところ大である。¹⁴

小論では、啓蒙の世紀において啓蒙知識人の一人、スミスが入学した当時のグラスゴウ大学の教育および組織改革に触れ、そこで形成された彼の道德哲学の基底にある幸福論、当時の理不尽な人為的諸政策への批判、そして民衆を

依存と従属から解放し、自己の行為の主體的当事者であるような独立した人間を育成するためのスミスの方策などを中心に、紙幅の許すかぎり明らかにしてみたい。

- (1) 高島善哉『アダム・スミス』、岩波新書、二〇〇四年、二二頁。
- (2) ロイ・ポーター『啓蒙主義』(見市雅俊訳)、岩波書店、二〇〇四年、一頁。
- (3) ポール・アザール『ヨーロッパ精神の危機』(野沢協訳)、法政大学出版局、一九七八年、第二部第一章を参照。
- (4) 弓削尚子『啓蒙の世紀と文明観』、山川出版社、二〇〇四年、一九頁。
- (5) 田中敏弘編著『スコットランド啓蒙と経済学の形成』、日本経済評論社、一九八九年、第六章を参照。
- (6) 一七・一八世紀の思想を動かしたフランス・サロンの役割を余すところなく描いた著作として以下を参照。赤木昭三・赤木富美子『サロンの思想史―デカルトから啓蒙思想へ―』、名古屋大学出版会、二〇〇三年。
- (7) J・プルースト『百科全書』(平岡昇・市川慎二訳)、岩波書店、一九八〇年、第一章を参照。
- (8) H・カーニィ『科学革命の時代―コペルニクスからニュートン―』(中山茂・高柳雄一訳)、平凡社、一九八三年、V、VI、VII、VIII章を参照。
- (9) 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』、新曜社、一九七六年、一四二頁。
- (10) 弓削尚子、前掲書、一三一―四頁。
- (11) 田中秀夫『啓蒙の射程と思想家の旅』、未来社、二〇一三年、九二―三頁。
- (12) Cf. W. L. Taylor, *Francis Hutcheson and David Hume as Predecessors of Adam Smith*, 1965, ch. 1, 2. W・L・テラー『ハチスン・ヒューム・スミス：経済学の源流』(山口正春・川又祐訳)、三恵社、二〇〇七年、第一章、第二章を参照。
- (13) スミスの道徳哲学の講義は四部門に分けられていた。すなわち第一部門の自然神学、第二部門の倫理学、第三部門の法学、第四部門は経済学である。Cf. Dugald Stewart, "Account of the Life and Writings of Adam Smith, L. L. D." in *Essays on*

Philosophical Subjects, edited by W. P. D. Wightman, J. C. Bryce, and I. S. Ross, Glasgow Edition, 1980, pp.274-5. イテュー

ゴールド・ステュアート『アダム・スミスの生涯と著作』（福鎌忠恕訳）、御茶の水書房、一九八四年、一一―一二頁を参照。

(14) 難波田春夫『スミス・ヘーゲル・マルクス』、講談社学術文庫、一九九三年、二六頁。

二 グラスゴウ大学の組織改革と学問的進歩性

もともとスコットランドは文化的には、イングランドよりオランダやフランスと交流が盛んであったが、イングランドとスコットランドとが合邦した一七〇七年以降、経済的に繁栄に向かうと、文化的・精神的な雰囲気には、意欲的で進歩的な空気がみなぎってきた⁽¹⁾。この時代、首都エディンバラと商都グラスゴウはヨーロッパ屈指の知的活動の場であり、そこでの目覚ましい知的・文化的運動の巨大な潮流は、ヨーロッパをリードする大きな影響力をもっていたのである。これらの都市を中心にして哲学、歴史、天文学、医学、化学、地質学、文学などの分野で卓越した人物を数多く輩出した⁽²⁾。このためエディンバラ大学⁽³⁾やグラスゴウ大学⁽⁴⁾には、イングランド、フランス、ロシア、アメリカなどから多くの学生を引きつけることになった⁽⁵⁾。このような知的進歩的な時代を背景に、スミスはグラスゴウ大学に入学したが、「スミスの時代には、学生は約三百人にすぎない」⁽⁶⁾地方の貧乏大学であった。しかしグラスゴウ大学は、経済と産業に直結した新しい学問をつくり上げていこうという潑刺とした知的雰囲気⁽⁶⁾がみなぎっていた。

ところでスミスが学び、後に教鞭を執ったグラスゴウ大学とは、一体どのような大学であったのか。グラスゴウ大学は生活費を含めて、学費が安く、宗教的にも比較的自由であって、学生の出身家庭といえは、貴族、借地農業者、

地主、聖職者、商人、職工などで、加えてアイルランド出身の学生が多数在籍していたのが、この大学の特色の一つであったと言われている。⁽⁷⁾このように多種多様な学生が集まっていたことは、学生同士が互いに切磋琢磨し合うことによつて学習意欲を高め、大学の学問水準を向上させることに役立つた。

これとは別に、グラスゴウ大学の学問水準を急速に高めるのに貢献したことの一つに、スミスが入学する十年程前から始まった一連の大学の組織改革があつた。⁽⁸⁾改革の中心となつたものは、リージェント制を廃して専門教授制を導入したことである。一七世紀においては、学寮の教育システムは、一般には一人の寮長と四人のリージェントから構成されていた。⁽⁹⁾各々のリージェントは、彼の担当するクラスにおいて四年間に亘る大学課程における全科目を受けもつた。当時、学位取得を望む学生は、ラテン語、ギリシャ語、論理学、数学、自然哲学および道徳哲学が必要であつた。さらにリージェントは学生のあらゆる事柄について面倒を見、大学内外での学生のすべての活動を指導し監督したのである。この結果、リージェント制は当然のことながら、学問研究の専門化を促進しないし、一般に学問研究の進歩・発展を妨げたし、大学の教育を低い水準にとどめる傾向を助長することになつた。

しかしリージェント制を廃して、専門教授制を導入することは、教師の担当する科目を減らし、学問研究以外の学生のすべての活動に対する監督と責任の負担を解消することによつて、教師の専門研究の活動を促進・発展させるとともに、専門的訓練を必要とする職業人を養成・訓練することのできる大学の学部の新設および拡大を促すことになつた。⁽¹⁰⁾その結果、両者の発展は、さらにカリキュラムの改革や新しい分野に属する科目の導入なども促すことにもなつた。

また同じ時期、学生の要求を受入れて総長選挙権を与えたことも、学生に大学のあり方を考えさせ、大学生活を充

実したものにすることに大いに役立った^⑪。加えて言えば、スコットランドの少年は素質さえあれば、どんな生まれでも教区や地主が援助して必ず大学まで進学できるといふシステムが出来上っていた。その結果、大学も貴族や大地主の御曹司が箔をつけるだけの場ではなくなり、「才能ある若者」の上昇志向に応える学問内容を用意せねばならなくなっていた^⑫。グラスゴウ大学には、こうした一連の大学制度改革や組織改革があつたことを見落すわけにはいかないであろう。

ところでグラスゴウ大学には、上に述べたように時代にマッチした諸改革とともに、この大学には学問研究の分野で高い評価を受けていた教師が相当活躍していたことも記憶されてよいだろう。それは、たとえばギリシャ語のアレグザンダー・ダンロップ、ユークリッド幾何学のロバート・シムスンたちであるが、とりわけスミスに最も影響を与えたのは、何と言つても流暢な言い回しのできる稀な才能、思想の新鮮さ、そして学生たちの心をしっかりと掴む、その真摯な態度を併せ持っている力強い魅力的な指導者フランシス・ハチスンであつたことは先に触れたところである^⑬。

ハチスンは当時、教会の見解とは異つて人間の幸福は来世ではなく現世において達成すべきものであつて、個々人の幸福を社会的に実現しようとする斬新な考えに基づく新思想をもつて、新しい分野の講座である道徳哲学の教鞭を執つていたが^⑮、自由潑刺たる雄弁と創造性をもつて大学内に知的自由を横溢させ、スミスの学問への関心を高め、晩年スミスに「忘れえぬハチスン」と言わしめたほどである^⑯。レイの次の文章はハチスンの人となりをよく表現しているであろう。「まことにこの人（ハチスン―引用者）ほどに、彼（スミス―引用者）の心を呼び覚まし、その思想を方向づけた人は、教育者にも著述家にもほかにはなかつた。スミスはある時はヒュームの弟子と言われ、ある時はケ

ネーの弟子と言われる。だがもし彼が誰かの弟子であると言うならば、むしろハチスンの弟子である。ハチスンと言うのは、まさしく青年の思想を刺激しそれを作り上げるに適した型の人間であった。¹⁸

さらにハチスンは、「およそ大学教授の中で最も印象の深い講義を行った一人であった。¹⁹」それはグラスゴウ大学の教師の中で、権威の装飾にすぎないラテン語で講義をすることを止めて自国語(英語)で行ったのは彼が最初であったことである。²⁰これは画期的なことであった。勿論それだけではない。学生たちに知的な刺激を与えた新しい分野の道德哲学の指導者ハチスンは、ジョン・ロックの弟子の第三代シャフツベリ伯を祖とする道德感覺学派の代表者であり、また「イギリス功利主義の創始者の一人」²¹でもあった。道德感覺学派に属する啓蒙知識人たちは、ホッブスやロック流の利己心中心の人間論や社会契約論を批判し、人間は利己心のほかに利他心をもっており、他人の幸福の増進を善と感じる道德感覺を具えているから、自ずから社会を形成するし、神学の知識がなくなるとも、善悪の判断をなしうると力説するのである。

神についてもハチスンは、宗教的オプティミズムを抱いており、彼の先輩ガーシヨム・カーマイケルの厳格なピューリタニズムとは対照的に、神とは人類の幸福²²福祉のために生き給うものであり、神の意志は神秘的な奇跡や摂理から知られるべきものではなく、人類のより大きな利益——「最大多数の最大幸福」²²——についての広範な考察によつて知られるべきものである、という考えをもっていた。つまり神秘的な神の奇跡を信じることより、人類の幸福²³福祉のために生きることこそ神の意志だとする新しい思想を主張したのである。こうした新鮮な思想内容は、一方で進取の気性をもった学生たちに深い感銘を与えたが、他方で当時のスコットランド教会の長老派聖職者たちにとつては許すことのできないことであった。²³ 当時は、民衆の生活に対する教会の支配は依然として強固であり、一七三六

年まで魔女狩りが公然と行われていた時期である。⁽²⁴⁾

このような教会の統制下、スミスが入学した年には教会の長老派聖職者たちは、ハチスンの講義がウェストミンスター信仰告白に反すると糾弾した。彼らはハチスンが道徳的善の基準を人々の幸福の促進に置き、また善悪に関する知識が、神に関する知識にかかわりなく得られるとする点で、危険思想を宣伝していると激しく攻撃した。だがハチスンを支持する若い世代は、情熱的激しさをもって、学外の旧勢力を圧倒したのである。入学したばかりのスミスが、学生の手スン擁護運動に指導的役割を演じたとは言えないが、新しい思想の到来を告げる明星としてのハチスンの姿は、青年スミスの心にはつきりと焼き付けられたであろう。⁽²⁵⁾ それ以前に神学の教師ジョン・シムスンも教会の最高宗教会議によって異端者と見なされ、牧師職と教職とをともに停止すべきことを命ぜられたが、大学は敢然とこれを拒否した。⁽²⁶⁾ そしてジェームズ・ワット⁽²⁷⁾が蒸気機関を発明したのも、こうした進歩的な大学の保護の下に、はじめて可能だったのである。⁽²⁸⁾

では自由で進歩的な活気に満ちた大学において、新しい思想の指導者ハチスンから最も強い影響を受けたスミスにあっては、如何なる思想つまり道徳哲学が生まれてくるのであろうか。次にそれを見よう。

- (1) V・H・H・グリーン『イギリスの大学―その歴史と生態―』（安原義仁・成定薫訳）、法政大学出版局、一九九四年、一〇〇頁。
- (2) 山崎怜「初期スミスにおけるスコットランド」『研究年報』⑥、香川大学経済学部、四六頁。
- (3) Cf. D. B. Horn, *A Short History of the University of Edinburgh, 1556-1889*, 1967, ch. 1.
- (4) J. D. Mackie, *The University of Glasgow, 1954*, p.73.

- (5) たとえばグラスゴウ大学に来た二人のロシア人学生は、デスニッキーとトレチャコフであった。彼らはモスクワ大学で学んでいたが、法律、道徳哲学、語学、それにもちろんできれば数学、自然科学をも勉強するためにイギリスへ派遣されたのである。(アニーキン『アダム・スミスの生涯』(松川七郎監修・小檜山愛子訳)、勁草書房、昭和五二年、第七章を参照。)
- (6) John Rae, *Life of Adam Smith, with an Introduction "Guide to John Rae's Life of Adam Smith"*, by Jacob Viner, 1977, p.50. J・レイ『アダム・スミス伝』(大内兵衛・大内節子訳)、岩波書店、昭和四七年、一一頁。
- (7) 浜林正夫・鈴木亮『アダム・スミス』、清水書院、二〇一四年、二八―九頁。
- (8) V・H・H・グリーン、前掲書、一〇五―一一頁。
- (9) Alexander Law, *Education in Edinburgh in the Eighteenth Century*, 1965, p.22.
- (10) 山崎怜『アダム・スミス』、研究社、二〇〇五年、二八頁。
- (11) 浜林正夫・鈴木亮、前掲書、二九頁。
- (12) 高橋哲雄『スコットランド 歴史を歩く』、岩波新書、二〇〇四年、一七二頁。
- (13) W. L. Taylor, *op. cit.*, p.14. 邦訳、一二頁。
- (14) ニコラス・フィリップソンによれば「ハチソンは十八世紀初頭の英語圏内で、もつとも野心的で尊敬された、革新的な哲学教師のひとりであった」という。(ニコラス・フィリップソン『アダム・スミスとその時代』(永井大輔訳)、白水社、二〇一四年、六九頁。)
- (15) V・H・H・グリーン、前掲書、一〇一頁。
- (16) 内田義彦『経済学史講義』、未来社、一九九五年、一一二頁。
- (17) ハチソンの場合、道徳哲学の中には、人間の現世での幸福が問題なのだから、講義は道徳だけでなく、宗教、法律、政治、経済などを含んでいたことに留意する必要がある。(水田洋『アダム・スミス』、講談社学術文庫、二〇一二年、二四頁。)
- (18) John Rae, *op. cit.*, p.11. 邦訳、一四頁。
- (19) *Ibid.*, p.11. 邦訳、一四頁。

- (20) W. L. Taylor, *op. cit.*, p.16. 邦訳、一四頁。
- (21) 水田洋『アダム・スミス研究』、未来社、二〇〇〇年、四八頁。
- (22) この有名な言葉は、ハチスンが言ったものである。(John Rae, *op. cit.*, p.12. 邦訳、一五頁。)
- (23) V・H・H・グリーン、前掲書、九三―四頁。
- (24) バカンが言うように「スコットランドは当時、ヨーロッパでもとくに遅れた国の一つであり、封建制度が残っていて、宗教の違いに不寛容で、極貧といえるほど貧しかった。」(James Buchan, *The Authentic Adam Smith-His Life and Ideas*, 2006, p.14. ジェイムズ・バカン『真説アダム・スミス…その生涯と思想をたどる』(山岡洋一訳)、日経BP社、二〇〇九年、一四頁。)
- (25) 水田洋『アダム・スミス研究』(前出)、四七頁。
- (26) 山崎怜、前掲書、二八頁。
- (27) 大野誠『ワットとステイーヴンソン』、山川出版社、二〇一七年を参照。
- (28) グラスゴウで開業を許されなかった若いワットが、グラスゴウ大学の実験室に部屋を与えられたのは、一七五八年、ニューコメンのエンジンの修理を頼まれたのは、一七六三年で、スミスがグラスゴウ大学で中心的な存在であった頃のことである。(内田義彦、前掲書、一一九頁。)

三三 スミスの道徳哲学

ハチスンの新思想は、スミスに強い影響を与えたが、その痕跡はスミスが『国富論』の中で、古代と近代(中世)との道徳哲学を比較して、次のように記述している文章を見れば明らかになるであろう。彼の意味する道徳哲学の性格をよく示している。

「個人としてだけでなく、家族の、国家の、さらには人類という一大社会の一員としてみる場合には、人間の幸福と完成とはそもそも何かということが、古代の道徳哲学の探究しようと企てた目標であった。その哲学では、人生の義務は、人生の幸福と完成の単なる手段として扱われていた。ところが、自然哲学ばかりか道徳哲学も神学に従属するものとしてしか教えられなくなると、人生の義務は、主として来世の幸福の単なる手段として扱われるようになった。古代の哲学は、徳の完成はそれを身につけた人に現世において最も完全な幸福を必然的にもたらすものだと主張した。近代の哲学は、徳の完成は大体、いやむしろほとんどいつでも、たとえそれがどんなにささやかなものであっても現世の幸福とは相容れないものだと主張したのであって、天国は、懺悔と禁欲、修道院の耐乏と神に対する卑下によつてのみ、勝ち得られるものであり、人間の自由で寛大な、活力に満ちた行動によつてではなかつた。⁽¹⁾」

すなわちスミスのいう道徳哲学は、人間としての、個人としての、家族・国家・人類の一員としての幸福を探究する学問であつて、来世のために現世の幸福を否定するものではなかつた。このことは取りも直さず、スミスがこういう人間否定の中世哲学⁽²⁾に対抗して、古代ギリシヤ哲学、古代哲学の伝統を継承し、個々人の幸福を社会的に実現しようとしたことを意味するであろう。ハチスンこそ、スミスにそういう方向を初めて示唆した人であつたのだ。ではスミスは、何をもつて人間の幸福と考えたのか。それは次の文章に示されているであろう。

「自己保存と種の増殖は、自然が、すべての動物の形成にあたつて意図したように思われる大目的なのである。……人類は、それらの目的についての欲望と、その反対物への嫌悪を与えられている。⁽³⁾」しかし、このようにして

「われわれは、それらの目的への非常に強い欲望を与えられているとはいえ、それらをもたらすための適切な手段を見つけ出すことは、われわれの理性の、遅くて、不確実な決定に委ねられてはいなかったのである。自然は、これらの大半に対して、本源的で直接的な諸本能によって、われわれを方向づけたのである。」⁽⁴⁾

ここから明らかなことは、スミスにとって幸福とは「生存」であること⁽⁵⁾、それへの道が「本能」によって示されていることである。スミスが幸福達成の道において、どちらかと言えば、人間の理性を軽視して、本能と生存(生命)を重視していることは留意しなければならない。彼は幸福達成において、理性を「遅くて不確実なもの」であり、本能は「本源的で直接的なもの」であると言っている。理性は人為的な政策を通して間接的に目的に到達しようとするが、本能は直接的である。しかも理性は人為的で不確実なものであるが、本能は神から被造物に付与されたものとして根源的なものである。人為的なもの、政策的なものを排して自然的なものへの尊重、これはスミスの根本思想を示す一つの特徴である。⁽⁶⁾ スミスが生存(生命)と本能を来世の幸福より重視したのは、彼がルネサンス・ヒューマニズムの流れを汲んでいるからであり、彼のギリシャ哲学、古代文化への尊敬も、人間の本来の姿を古代文化の中に見たヒューマニストの態度と共通のものをもっていったからである。⁽⁷⁾ そして生存(生命)と本能の重視というかぎりでは、社会で営む平凡な日常生活の中にも幸福は見い出されるのであり、むしろスミスは「自然と本能に従った生活」、「やさやかな幸福」⁽⁸⁾を「崇高な思索」に優先させたのであった。⁽⁹⁾

それは次の文章に、はっきりと述べられているであろう。

「宇宙という偉大な体系の管理運営、すなわちすべての理性的で感受性ある存在の普遍的な幸福についての配慮は、

神の業務であつて人間の業務ではない。人間に割り当てられているのは、ずっとつまらない部門ではあるが、しかし彼の諸能力の弱さと彼の理解の狭さは、はるかに適切なもの、すなわち彼自身の幸福について、彼の家族、彼の友人たち、彼の国の幸福についての配慮である。¹⁰」

社会の中で生活する人間の、自分自身・家族・友人・国家・人類に対する現実的配慮こそ、人間にとって意義のある仕事である。意義のある仕事とは、スミスにあつては営利活動だけでなく、為政者や立法者の仕事、軍人の軍務、¹¹「人間生活の維持、便益、装飾に貢献する技術を発明し改良した」¹¹科学者の仕事が含まれていることは留意しなければならない。スミスの狙いは、人類の普遍的な幸福を願いながらも、人間が自己を取り巻く身近かな実社会の中で日々の日常生活・世俗行為に積極的にかかわることによって、個人的・社会的・国民的な幸福を着実につくり上げていくことにある。

- (1) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Glasgow Edition, 1976, Vol. II, p.771. (以下、WNと略記) 大河内一男監訳『国富論』中央公論社、一九七六年、Ⅲ、一二八―九頁。
- (2) 阿部謹也『中世の星の下で』ちくま文庫、一九八七年、九四―一〇二頁参照。
- (3) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Glasgow Edition, 1976, p.77. (以下、TMSと略記) 水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房、一九七三年、一二〇頁。
- (4) TMS, p.77. 邦訳、一二〇頁。
- (5) 因みに道徳哲学が、来世ではなく現世での幸福を実現しようとしたことは、原始仏教で釈迦が、来世のために現世の幸福

を否定するものではなかったのと同様である。釈迦が問題にしたのは、この現実の日常の生存であった。釈迦にとっては、死後の世界があるか否か、というような問題は現在、只今の苦しみを救うものではないから、どうでもよいことだった。釈迦は、どこまでも人間を中心として、日常生活を見ようとした。(鎌田茂雄『仏陀の観たもの』、講談社学術文庫、二〇一三年、第二章を参照。)

(6) 大道安次郎『スミス経済学の生成と発展』、日本評論社、一九八八年、七五頁。

(7) 水田洋『アダム・スミス研究』(前出)、一八五頁。

(8) スミスの幸福論は次の一文に凝縮されている。すなわち「健康で、借金がなく、しかも心の中に何らやましいところのない人の幸福には、それ以上いかなる幸福を加えることができるであろうか。」(TMS, p.45. 邦訳、六五頁。)ありふれた食事、平凡な生活、その中にあるささやかな幸福こそ人生の本当の意味の幸福である、こうスミスは言いたいようだ。まさに宗教家としてのスミスの側面が如実に示されているだろう。

(9) 水田洋『アダム・スミス研究』(前出)、一八五頁。

(10) TMS, p.237. 邦訳、四七二頁。

(11) TMS, p.134. 邦訳、一五二頁。

四 政治経済学の目的

既に述べたようにスミスにあっては、人間の幸福とは現世において、生存していくこと、生活していくことであった。そしてそれへの道が本能であった。決して中世の哲学のいう来世での幸福ではなかった。水田洋は次のように言う。すなわち「道徳哲学が、人間の現世での幸福についての学問であるとすれば、それから分化してきた経済学も、

そうであるはずであった。この世での幸福は、確かに精神的なものを含むけれども、その精神的な幸福を享受するためにさえ、人間は生きていかなければならないのだから、生活資料の調達という物質的な条件を確保しなければならぬ。だからスミスにあつては、生活資料が豊かに得られるという物質的な幸福を無視することができないのである^①と。

スミス自身は『国富論』第四編「政治経済学の諸体系について」の中で、既存の経済学史、経済思想史を検討し、自己の経済学的な立場を明確に打ち出している。彼の政治経済学の目的は、極めて明瞭である。彼が言うには「その第一は、国民に豊かな収入もしくは生活資料を供給することである。つまり、もつとはつきり言えば、国民にそうした収入や生活資料を自分で調達できるようにさせることである。第二は、国家すなわち公共社会に対して、公務の遂行に十分な収入を供することである。だから政治経済学は、国民と主権者の双方をともに富せることを目指している^②」と。ここには君主、貴族、富裕階層の利益ではなく、大多数の人民（民衆、国民大衆）の生活の安定と向上、つまり福祉向上を目指すことが、政治経済学の目的である、とはつきり述べられている。スミス経済学の真骨頂を示す宣言であり、国民経済学の成立と言つてもよいであろう^③。

それはそうと、スミスの生きた一八世紀のイギリス社会は、先にも述べたように社会改革、近代科学の普及と技術革新、経済の発展といった啓蒙の世紀であつた。一方、格差と貧困、財政難と戦争といった深刻な社会問題を抱えた世紀でもあつた。^④イギリスでは一七世紀以降、大規模農場を生みだした土地の「囲い込み」によつて、土地を奪われた農民が新興の産業都市に流れ込み、これらの人々は産業労働者のプールになると同時に、近代のスラムを形成するようになったのである。この土地の「囲い込み」は、広く資本制農業を成立させるもので農業革命とも呼ばれ、

一七六〇年代から産業革命に並行して進行した。まだ機械制工業の下での悲惨な光景は見られなかったけれども、こうした、いわば資本主義の成立とともに生ずる階級的貧困の問題をスミスが視野に入れ憂慮していたことは間違いない。^⑤ バカンもスミスは「社会の中で最も貧しい階級に対する関心が強かった」と記している。^⑥

当時、イギリス社会には、大勢の人民が窮乏状態に陥っていた。^⑦ こうした明日の生活にも困る多くの貧困者が巷に溢れているような状態をスミスは、何としても改善したかったのだ。彼は『国富論』で次のように言及している。

「人民の圧倒的大部分が貧しく惨めであるとき、その社会が隆盛で幸福であろうはずは決してない。それに、人民全体を食べさせ、着させ、住ませるこれらの人々が、自分自身もかなり十分に食べたり、着たり、住んだりするだけの、自分自身の労働の生産物の分け前にあずかるのは、全く公正なことなのである。^⑧」

引用文から分かるようにスミスの生きた時代は、人民の圧倒的大部分が貧困であり、彼のいう「生活上の必需品および便益品」^{⑨⑩}（生活資料Ⅱ消費財）を入手できない窮乏状態にあった。深刻な生活資料の不足に陥っていた。現代の先進諸国に見られる生活資料の溢れた状況とは対照的であったのだ。スミスはイギリスで資本制社会の成立とともに生じた階級的貧困、貧民の置かれている悲惨な状況、貧困の悪影響や害悪などについて多くの事例を挙げているが、そのいくつかを挙げてみよう。

「今でもスコットランドの多くの地方では、小屋住み農と呼ばれる一群の人々が暮している。……この人達は、地主や農業者にとつて一種の通いの使用人である。……彼らはごく少ない報酬と引換えに、自分の余分な時間を誰れにでも喜んで提供し、他の労働者よりも少ない賃金で働いていた。^⑪」

「貧困は……子供たちの養育にはすこぶる不都合である。……スコットランドのハイランド地方では、一人の母親

で二〇人もの子供が生まれても、そのうちの二人とは生きていない、と言うことも珍しくはない。……ある地方では、生まれた子供の半分が四歳になるまでに死に、多くの地方では七歳になるまでに、また大抵の地方では九歳か十歳になる前に死んでしまう。こうした高い死亡率は、主として庶民の子供たちの間で至る所で見出される。¹²⁾

「貧困者の子供たちが教育のために割ける時間は、ほとんどない。彼らの両親は、幼い彼らをさえ養いかねる位なのである。働けるようになるやいなや、彼らは自分の食い扶持を稼ぎ出せるような、何かの職業に身を入れざるを得ない。¹³⁾」フランスでは、さらにフランスよりも労働に対していくらかよい報酬が支払われているスコットランドでさえ、労働貧民は祭日や特別の日以外には肉を減多に食べない。¹⁴⁾

このように社会の圧倒的大部分を占めている労働者、職人、使用人などの人民の暮らし向きが悪く、生活水準が低い状態は、人民の大部分が困窮しているわけで、そんな社会が幸福であろうはずはない。人民の大多数の暮らし向きが困窮状態に陥っていれば、その人民は富裕の恩恵を享受していないのである。¹⁵⁾ スミスにあっては富裕国とは、生活資料が豊富に人民に行き渡っている国にほかならない。富を金銀などの貴金属だとし、国を豊かにするためには貿易統制を用いて可能なかぎり、多くの貴金属を自国に流入させることだと考えた重商主義者と違って、スミスは人々が労働によって作り出す「生活上の必需品および便益品」¹⁶⁾ 生活資料が、真の国民の富であると考えたことは上述の通りである。そこでスミスにあっては、社会の大多数の貧しい人々を救済するためには、国民の富¹⁷⁾ 生活資料が増大すること、すなわち経済成長が最重要課題になってくる。国民の富の増大すなわち経済成長があつて始めて、社会の圧倒的大部分を占める労働貧民の生活条件を改善すること、つまり人民の福祉向上が達成されるのである。

だとすれば、国民の富を増大させる要は何か。スミスによれば、分業と市場の拡大と資本蓄積であることは周知の

ことである。富をもたらす分業、その分業がなされるためには、前もって資本が蓄積されていなければならず、また分業の成果である商品に対して市場が存在しなければならぬ。これら三つの要因の発展と増大によつて、労働生産性が向上するに従つて、「富裕が一般に、社会のさまざまな階級のすべてに行き渡るのである。」⁽¹⁶⁾このように見てくると、スミスの意図した経済成長は、窮乏生活に喘ぐ貧困層を救済するためであつたことが分かるのである。

- (1) 水田洋『アダム・スミス』(前出)、一二九頁。
- (2) W.N., I, p.428. 邦訳、Ⅱ、七五頁。
- (3) 黒須純一郎『中産階級の経済学』、北樹出版、二〇〇九年、一五五頁。
- (4) 堂目卓生『アダム・スミス』、中公新書、二〇〇八年、一四―五頁を参照。
- (5) 鈴木亮「アダム・スミスの時代と学問」(『経済』、第一四六号、新日本出版社、所収)を参照。
- (6) James Buchan, *op. cit.*, p.6. 邦訳、一二三頁。
- (7) 長島伸一『世紀末までの大英帝国―近代イギリス社会生活史素描―』、法政大学出版局、一九八七年、第一章、第三章を参照。
- (8) W.N., I, p.96. 邦訳、Ⅰ、一三三―四頁。
- (9) W.N., I, p.10. 邦訳、Ⅰ、一頁。
- (10) スミスは第五編で「消費財とは必需品か、便益品かのどちらかである」(W.N., II, p.869. 邦訳、Ⅲ、二九七頁)と述べており、財の区別は、はつきりせず、一貫していない。しかし必需品は、習慣的に決まると考えている。すなわち「私が必需品という場合、それは生活を維持するために必要不可欠の財貨だけでなく、その国の習慣からして、たとえ最下層の人々でも、それがなければまともな人間としては見苦しいようなものすべてを含む」と。(W.N., II, pp.869-70. 邦訳、Ⅲ、二九八頁。)
- (11) W.N., I, p.133. 邦訳、Ⅰ、一九四頁。

- (12) WN, I, p.97. 邦訳、I、一三四―五頁。
- (13) WN, II, pp.784-5. 邦訳、III、一四六―七頁。
- (14) WN, I, p.207. 邦訳、I、三二〇頁。
- (15) E・ロイストン・パイク『アダム・スミス―経済学の創始者―』（中村恒矩・竹村孝雄訳）、法政大学出版社、一九七一年、五頁。
- (16) WN, I, p.22. 邦訳、I、一二頁。

五 社会的束縛からの人間の解放

上に述べたように、スミスが『国富論』の中で目指した国民の富の増大つまり経済成長は、困窮している国民大衆の生活資料を増産するためであり、決して重商主義者のいう富¹貴金属をかき集めるためではなかった。つまりミスが意図した経済成長は、重商主義政策を推進した貿易商人や製造業にとっての単なる金儲けではなく、あくまで困窮している人民の生活状態を可能なかぎり改善するためであった。いわば貧困層の生活水準の向上、衣食住の充実のための経済成長であった。重商主義体制に加えてもう一つ、商工業が起きず社会発展を阻止し、その結果、民衆の現世での幸福を妨げているものとしてスミスの目に映ったのは、封建的諸制度たとえば長子相続制度、同業組合、徒弟条例、定住法などの社会的な束縛や抑圧であった。だからスミスの脳裏には、社会的な束縛や抑圧からの人間の解放という課題があつたことを忘れてはならないであろう。スミスは人間の解放の思想の流れに棹さして思索を進めたのである。貧困からの解放は、人間解放の重要な側面なのであり、スミスが重商主義的独占と特権、さらに封建的諸制

度を厳しく批判しつつ富裕への自然な道筋を示そうとしたのは、そうした課題に即する努力だったのである。^②

自己みずからが主体的に行動できる独立した人間に社会の大多数の人々が成り得る条件が満たされて初めて、社会的な束縛や抑圧から人々を解放できるとスミスは考えた。そして社会の大多数の人々を従属的地位から解放し、人格的に独立を達成するためには人々の生活の安定、生活水準の向上の確保が最も重要な事柄であるとスミスは認識するに至ったのである。人々の独立を支える基底は、まさに経済的・物質的条件であり、さらに社会の犯罪行為を防止する、すなわち社会の正義を守る基本は、商工業を樹立し、人々の生活の安定、衣食住の充実であるとさえスミスの目に映ったのである。^④ だからスミスは次のように言う。「商工業の樹立は、この独立をもたらすものであつて、犯罪を防止する最善の治政である。そうすることによつて、一般民衆の他のいかなる場合よりも、よい賃金を得、その結果として一般に誠実な態度が全国に行き渡る」と。^⑤ これに関連してスミスは、治政と安寧との関係について、次のように言及している。

「最大の治政があり、それに関して最も多くの規制が行われている諸都市に、必ずしも最大の安寧が存在するわけではない。パリでは、治政に関する諸規制は、数冊の書物に収録しきれないほど多いが、ロンドンにおいてはただ二、三の簡単な規則があるだけである。しかもパリでは殺人の行われないうちはなく、これに反してロンドンではパリより大きな都市であるのに、殺人は年にわずか三、四回しか起らない。この点から人は、治政の大なるほど安寧が少ないと考えやすいが、しかしそれが原因なのではない。……犯罪行為を防止するものは、治政であるよりも、むしろ他人に衣食する者をできるだけ少くすることである。従属 (Dependency) ほど人間を腐敗せしめるものはなく、しかしこれ

に反して、独立 (independency) は人々の正直をさらに増進するのである。⁽⁶⁾」

スミスにあつては、社会の土台石としての正義を侵害されないためには、法的規制が必要である。⁽⁷⁾ とはいえ、いかに法を整備しても、正義の侵害を防止することはできない。むしろ犯罪行為を防止する、すなわち正義を守るためには、人々を従属的地位から解放し、独立させること、これが最善である、スミスはこう考えたのである。スミスの頭の中にあつたのは、人間の人格的独立であり、またそのような人間の営む自由な社会であつた。だがそうした独立の達成のためには、その物質的基盤として、まず社会を構成する人々の経済的独立が達成されなければならないし、そのためには社会の経済が確立されて、スミスのいう普遍的富裕 (universal opulence)⁽⁸⁾ の社会が実現されねばならない。

普遍的富裕とは、すべての人々、とりわけ貧困な労働者階級や下層階級の人々に至るまで富裕の行き届いた状態なのであるが、その実現のためには当然、生産力のより高度な発展つまり経済成長が達成されなければならない。⁽⁹⁾ そればかりでなく普遍的富裕の状態こそ社会のあらゆる人々が、経済的依存と人間的従属関係から解放されて、一人の独立した人間として成長するための必要条件なのである。このように人民を経済的依存と人間的従属関係から解放し、自己の行為の主體的当事者であるような一人の独立した人間として成長する願いが、スミスには込められていた。その願いの一つの現れは、重商主義的な労働者像とは違ったスミスの新しい労働者像に基づいた高賃金論の中に見い出されるであろう。重商主義期には労働者は労働を忌避し、怠惰を好む存在と見なされ、そうした労働者を労働へ誘因する方向として、低賃金政策が推賞されていた。

たとえばトニーによって「阿呆でない人なら誰でも知っているように、下層階級は貧乏にしておかなければなら

ない。そうでなければ、彼らは決して勤勉にならないであろう。」「高賃金は……貧しい家庭には何の役にもたたない。なぜなら、一日に三シリングないし四シリングを稼ぐ労働者は、ほとんど週に三日以上働かなくて、他の日は飲み明かすからである¹⁰」というヤングの言葉が紹介されている。またロイ・ポーターによつて、「労働者の賃金を上げるという案は間違ひである。そんなことをすれば彼らの生活がましになるどころか、彼らをますます怠け者にするだけである¹¹」というドクター・ジョンソンの言葉が引用されている。スミスも労働それ自体を人間の自己充足的な行為と捉えるわけではなく、一般の労働を人間にとつて「自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の……犠牲¹²」であると認識している。したがつて人間は、誰もが自然に勤勉を實踐できるわけではなく、労働者の勤勉を引き出すためには、何らかの誘因が必要である。だがスミスは、それを重商主義者のような低賃金としない。「賃金は勤勉の刺激剤である¹³」と主張し、重商主義者の低賃金論を否定し、高賃金こそが労働者の勤勉を促進して労働生産性を向上させるとして高賃金の経済論を展開する¹⁴。

重商主義期の古い労働者像から新しい労働者像へのこうした変化は、スミスの見解において一つの頂点に達した。すなわち彼は、高賃金は怠惰への誘因として排斥され、労働者を勤勉たらしめるためには賃金を最低生活水準に保つておく必要がある、という重商主義期の見解の誤りを指摘するのである。このことは以下の文章に、はつきり述べられている。「豊かな労働の報酬が増殖を刺激するように、同じく庶民の勤勉をも増進させる。労働の賃金は勤勉の刺激剤であつて、勤勉というものは、他の人間のすべての資質と同じように、それが受ける刺激に比例して向上するものである。生活資料が豊富であると労働者の体力は増進する。また自分の境遇を改善し、自分の晩年が安楽と豊富のうちで過ごせるだろうという楽しい希望があれば、それは労働者を活気づけて、その力を最大限に發揮させるように

なる」⁽¹⁵⁾と。ここに見られるように、スミスによれば労働者の勤勉を引き出すためには、何らかの誘因が必要になるが、スミスはそれを重商主義の経済論のように低賃金とはしないのである。スミスは重商主義の論理を逆転させて「つまらない仕事では、労働の楽しみはもっぱら労働の報酬にある」⁽¹⁶⁾と指摘し、労働の賃金は勤勉への刺激剤なのだと主張するのである。したがってスミスにおいて、重商主義的な労働者像、労働観からの決定的な転換が認められるのである。

こうした怠惰な貧民という労働者像から金銭的刺激に敏感な反応を示す新しい、いわゆるホモ・エコノミクス(経済人)としての労働者像への転換が、スミスの自由競争に立脚する市場経済のビジョン構築の大前提にあったことを忘れてはならないであろう。そして彼は、労働者のホモ・エコノミクスへの転換を見通したうえで、そのような労働者の自由な行動を拘束しているあらゆる規制と制限の撤廃を主張したのである。⁽¹⁷⁾ スミスにあっては、労働者や職人たちが自由に自己の意思に基づいて働くことを同業組合、徒弟条例、定住法などの社会的な束縛によって妨げるべきではなかった。⁽¹⁸⁾ スミスにとって、競争を制限したり、労働者の自由な移動を妨害したりすることは、重商主義的規制と同様、人為的な政策にほかならず、事物の自然的な流れと正義に対する明らかかな侵害であったことは先にも述べたところである。⁽¹⁹⁾ スミスは「すべての巨大な政治社会の圧倒的な大部分を構成している労働者、職人」の「生活条件を改善することが、その全体にとって不都合とみなされるはずはない」「人民全体を食べさせ、着させ、住まわせるこれらの人々が、自分自身でもかなり十分に食べたり、着たり、住んだりするだけの、自分自身の労働の生産物の分け前にあずかるのは、まったく公正なことなのである」⁽²⁰⁾と述べるとともに、労働者のための社会的公正の立場から高賃金を擁護したのである。ここには、スミスのヒューマニストとしての一端を垣間見ることができよう。

- (1) スミスは重商主義の思想が、素朴な重金主義、拝金主義から出発したことを指摘して、次のように言っている。「富と貨幣は、要するに日常用語では、あらゆる点で同義と見なされている。富んだ国は、金持ちの場合と同様に、貨幣の豊富な国だと考えられ、どの国も、金銀を山と積み上げることが、国を富ませる最も手早い途だと考えている。」(WN, I, p.429. 邦訳、七八頁)
- (2) 浜林正夫・鈴木亮、前掲書、五一―六頁。
- (3) 下記の著作に描かれるのは、一七世紀末から一八世紀初めにかけてのロンドンとそこで営まれたさまざまな生活で、登場するのはロンドンに蠢く身分も職業も種々雑多な人々で、面白く読める。ネッド・ウォード『ロンドン・スパイ―都市住民の生活探訪―』(渡邊孔二監訳)、法政大学出版社、二〇〇〇年。
- (4) 岡田純一『経済思想史』、東洋経済新報社、昭和五〇年、五六頁。田中正司『アダム・スミスと現代』、御茶の水書房、二〇〇〇年、六七―九頁参照。
- (5) *Lectures on Jurisprudence*: Report dated 1766., edited by R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein, Glasgow Edition, 1978, p.487. (以下、*LJB*と略記) 高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大学講義』(復刻版)、日本評論社、一九八九年、三二―五頁。
- (6) *LJB*, pp.486-7. 邦訳、三二―四―五頁。
- (7) 高哲男『アダム・スミス』、講談社選書メチエ、二〇一七年、二四七頁。
- (8) Adam Smith, “Early Draft” of part of the *Wealth of Nations*, in *Lectures on Jurisprudence*, Glasgow Edition, 1978, p.566. (以下、*ED*と略記) 水田洋訳「国富論草稿」『法学講義』、岩波文庫、二〇〇五年、所収、四五―二頁。
- (9) 竹本洋『国富論』を読む―ヴィジョンと現実―、名古屋大学出版会、二〇〇五年、一―一八頁を参照。
- (10) トーニー『宗教と資本主義の興隆』(出口勇蔵・越智武臣訳)、下巻、岩波文庫、一九九三年、二〇―一頁。
- (11) ロイ・ポーター『イングランド18世紀の社会』(目羅公和訳)、法政大学出版社、一九九六年、一三―二頁。
- (12) WN, I, p.50. 邦訳、一、五七頁。

- (13) WN, I, p.99. 邦訳、I、一三八―九頁。
- (14) P. J. Menulty, "Adam Smith's Concept of Labour", *Journal of the History of Ideas*, vol.34, 1973, p.358. Thomas A. Horne, *The Social Thought of Bernard Mandeville: Virtue and Commerce in Early Eighteenth-Century England*, 1978, p.69. 拙訳『バーナード・マンデヴィルの社会思想―十八世紀初期の英国における徳と商業―』、八千代出版、一九九〇年、一〇〇頁。
- (15) WN, I, p.99. 邦訳、I、一三八頁。
- (16) WN, I, p.139. 邦訳、I、一〇四頁。
- (17) 高木正道『ヨーロッパ初期近代の諸相―経済史と心性史のあいだ―』、梓出版社、一九八九年、一四四頁。
- (18) アンドルー・スキナー『アダム・スミスの社会科学体系序説』（川島信義・小柳公洋・関源太郎訳）、未来社、一九七七年、一二五頁。当時の社会的束縛については、金澤周作『チャリテイの帝国―もうひとつのイギリス近現代史―』岩波新書、二〇二一年、六六―七〇頁参照。
- (19) 浜林正夫・鈴木亮、前掲書、一七〇―二三頁参照。
- (20) WN, I, p.96. 邦訳、I、一三三―四頁。

六 むすびにかえて

既述のように啓蒙の世紀には、非合理的な制度、理不尽な迷信⁽¹⁾、さらにキリスト教に対しても批判的な態度で臨み、理性によって自由に行動する精神が芽生えてきた⁽²⁾。非科学的な古い制度が見直される一方で、学問・科学が発達し、さまざまな社会改革が行われた⁽³⁾。また、この世紀には大航海によるヨーロッパの外の世界との接触によって、知のあり方を窮屈なキリスト教の枠組から解き放つ時代でもあった⁽⁴⁾。こうした知の大転換によって新たな啓蒙知識人が生ま

れ、知の環境や知的組織が変化していった。たとえばスコットランドでは、大学でも改革が積極的に行われて、啓蒙の時代の教育と研究を担う自由な知の活動が営まれた。小論で取り上げたグラスゴウ大学は、その典型であった。⁽⁵⁾

こうした大学では、伝統的な知の中心であった神学部がその指導的地位を追われ、新しい学問分野⁽⁶⁾ 道徳哲学の講座に重きが置かれるようになった。⁽⁶⁾ 啓蒙の世紀の原理となった理性と批判の精神は、人々を社会的束縛から解放すべきであるという思想を生み出すことにもなったと同時に、人権の思想を掲げて人間の幸福と公正が追求されるようになったのも、この時代であった。⁽⁷⁾ 啓蒙知識人の一人、スミスはこうした時代環境の下で活躍したのである。度々述べたように、スミスの道徳哲学は現世での人間の幸福を探究する学問であって、来世のために現世の幸福を否定するものではなかった。中世の哲学ではなく、古代ギリシャの古代哲学を評価したのもそのためであった。⁽⁸⁾ 現世での人間の幸福を如何に達成するかはスミスの一生は、捧げられた。彼が『国富論』で目指した国民の富の増大⁽⁹⁾ 経済成長も人々の生活資料を増産するとともに、現世での人間の幸福の達成と社会的束縛から人々を解放するためであった。したがって幾度となく述べたように、スミスの経済成長は重商主義的富⁽¹⁰⁾ 貴金属をかき集めるためでなく、あくまで困窮している人々の生活状態を可能なかぎり改善するためであった。いわば貧困層の生活水準の向上、衣食住の充実のための経済成長であった。スミスにあつては、自らの道徳哲学の根底にある現世での幸福を最優先させたと言えるであらう。⁽⁹⁾

加えて彼の道徳哲学の根底には、経済成長の必要性とも関連するが、社会的な束縛や抑圧からの人間の解放という課題も据えられていたことも先に触れたところである。貧困からの解放は、人間解放の重要な側面であり、そのためには経済的独立（自立）が如何に重要な課題であるかをスミスは説いたのである。なぜなら、一人の人間として人格

的に独立するためにも、経済的独立が必要だからである。スミスのこうした考えの一環として、賃金論においては重商主義的低賃金論ではなく、人々の豊かな生活が可能であるような高賃金を擁護し、また人為的な政策によって競争を制限したり、社会的公正の立場から人々、とりわけ労働者と職人の自由な移動を妨害すべきではないと主張したのである。

さらに加えて言えば、経済成長が軌道に乗れば雇用機会が増え、失業者が減少する。人は失業すると経済的苦境に陥ると同時に、精神的苦痛も味わう。たとえ本人に責任はなくとも、世間は失業者を軽蔑し否認する。スミスは貧困者や下賤の者を軽蔑したり、あるいは無視したりする人間の道徳的腐敗を次のように痛烈に批判している。すなわち「富裕な人々、有力な人々に感嘆し、ほとんど崇拜し、そして貧乏で卑しい状態にある人々を軽蔑し、少なくとも無視するという、この性向は、……われわれの諸道徳感情の腐敗の、大きな、そして最も普遍的な原因である^⑩」と。

したがって、世間から軽蔑の目で見られている貧困状態に陥った失業者が、人間の幸福を現世で手に入れることは困難である。だから、人々の現世での幸福を考えれば、失業者を減らさなければならぬ。そしてそのためには、雇用機会を増やすことが必要で、それには経済成長が必要なのである。啓蒙知識人スミスの道徳哲学の根底にあったのは、人々の日々の暮らしの生活資料を増やすため、経済成長を軌道に乗せて、人間としての幸福を味わってもらったのであった。まさに啓蒙の世紀に生きて啓蒙知識人スミスの頭の中にあったのは、人々を貧困から解放し、人々に現世での人間の幸福を享受してもらいたいと言う願いであった。そのため、中世以来の旧思想ならびに古い経済社会システムと果敢に戦った社会改革家と言えるであろう。

- (1) ポール・アザール、前掲書、第二部第二章を参照。
- (2) いい換えれば、佐伯啓思が言うように、前近代社会を特徴づける宗教的秩序から世俗的秩序への転換、つまり人間が神中心の世界からいかに自立するか、神ではなく、人間が主役となるような社会秩序の編成が、どのようにして可能となるかという探究が進行したと言ってもよからう。(佐伯啓思『人間は進歩してきたのか―現代文明論(上)―』、PHP新書、二〇〇三年、七二頁。)
- (3) ポール・アザール、前掲書、第三部六章を参照。
- (4) 弓削尚子、前掲書、一三頁。
- (5) 山崎怜『アダム・スミス』(前出)、三〇頁。
- (6) ニコラス・フィリップスン、前掲書、六一―四頁。
- (7) ポール・アザール、前掲書、第三部第五章を参照。
- (8) 水田洋『アダム・スミス』(前出)、二二―三頁。
- (9) 河上肇『貧乏物語』(大内兵衛解題)、岩波文庫、二〇〇八年を参照。植村邦彦『隠された奴隷制』、集英社新書、二〇一九年、七〇―五頁参照。
- (10) *TMS*, p.61. 邦訳、九五頁。
- (11) Cf. Thomas A. Horne, *Property Right and Poverty: Political Argument in Britain, 1605-1834*, 1990, ch. 2.